土佐のわらべ

第４１８号《第４４０回（２０１６．９．８）　子どもの本の読書会記録》参加者５人・文書参加３人

『あらしの前』『あらしのあと』　ドラ・ド・ヨング／作　　岩波書店

本書の舞台はオランダ、第二次世界大戦が始まっていた時代です。登場人物は、オールト家のおとうさん、おかあさん、長女のミープ、長男のヤープ、次男のヤン、次女のルト、三男のピーター・ピム、三女のアンネ、女中のヘーシェ、そして途中から一家に加わったユダヤ人の男の子ヴェルナーです。穏やかで楽しい毎日を送っていた一家ですが、次第に戦争というあらしに巻き込まれていきます。

この本を書いたドラ・ド・ヨング氏は 1911 年生まれのオランダ人で、第二次世界大戦の間は、ナチスに占領されたオランダから逃げてほうぼうへ移り歩くという生活をしていました。そのような経験から、『あらしの前』では、普通の生活の中に戦争がじわじわと近づいてくる様子が、そこから６年が経った『あらしのあと』では、戦争によって人々の生活がどのように変わってしまったかが、とてもリアルに描かれています。

２冊を通して戦争の最中の描写はありませんが、戦争の前後で子どもたちが変わっていく様子から、『あらしの前』と『あらしのあと』の間にあった過酷な日々と、彼らの苦悩を読み取ることができます。

読書会に参加された方からは、次のような感想が語られました。

・サンタになって末っ子を喜ばせたり、プレゼント交換をしたり、クリスマスの幸せなシーンが好き。
・『あらしのあと』の後に、もう一度『あらしの前』を読んだらとてもつらかった。
・戦争の時代しか知らないミープの息子ロビーの言葉に、胸が締め付けられた。幼い子供に戦争が与えたものは大きい。
・重いテーマなので気合を入れて読まなくてはと思ったが、戦争だけでなく一つの家族の物語であり、それぞれが成長していく様子がしっかりと描かれているので読みやすかった。
・平和がずっと続くといいなあと思った。
・読み終えて、気持ちが優しくなったように思う。オールト一家のように生きる事が出来たら、世界の人間がみんなそうできたら、平和な世界も夢ではない。

文中、お母さんはヤープにこう語りかけています。

「あなたは、戦ったり憎んだりすること以外に、もっとほかのものがあるってことを、人びとに感じさせることができます。それがあなたの仕事よ、ヤープ。同じように、この世界をもっといいところにするのが、どの子どもにとっても、つとめなんです。ひとりひとりの子どもが、それぞれじぶんのやり方で、それをするのね。」

『あらしのまえ』は、1943 年にアメリカで初めて発表されました。それから 70 年以上たった現在、私たちは「世界をもっといいところにする」ことができているでしょうか。

残念ながら、世界では今も戦争やテロが続いています。オールト一家の物語は、そんな時代に生きる私たちにたくさんのことを考えさせてくれる本でした。

（A.T）